平田靱負屋敷跡

記念物（史跡）
昭和 29 年 5 月 24 日指定
所在地：鹿児島市平之町
所有者：鹿児島市



平田靱負屋敷跡は、宝暦（1751 ～ 1761）年間の木曽川治水工事の際の総奉行で、当時の島津藩の勝手方家老であった平田靱負正輔の屋敷跡である。現在は平田靱負を顕彰する史跡として公園（平田公園）となっている。

平田靱負の屋敷は、天保年間の鹿児島城下絵図によると、柿本寺馬場に面し、天保の改革で功績のあった調所笑左衛門広郷の屋敷の前にあたる。さらに、屋敷続きには、藩の弓術師範の東郷家の屋敷があった。

木曽川治水工事とは、宝暦 3（1753）年 12 月、薩摩藩が幕府から美濃の木曽・長良・揖斐三河川の治水工事を命ぜられたため、家老であった平田靱負を総奉行とし、千人近くの藩士を動員して、40 万両にものぼる経費を費やして実施した事業である。

平田靱負は、この事業によって数十名の藩士を犠牲にし、莫大な借金をした責任をとって、工事が完成した翌日に自刃して果てた。

現在、ゆかりの公園では毎年 5 月に、岐阜県からの一行を含め大勢の人々が参加して慰霊祭が行われている。



平田靱負屋敷跡



平田靱負銅像

南洲墓地

記念物（史跡）
昭和 30 年 1 月 14 日指定
所在地：鹿児島市上竜尾町
所有者：鹿児島市



南洲墓地は、明治 10（1877）年の西南戦争で戦死した西郷隆盛をはじめ、桐野利秋、村田新八、篠原国幹ら 2,023 人の薩軍将兵の墓地である。

もともとこの地は、江戸時代に時宗浄光明寺の寺域であったところである。

政府軍は、9 月 24 日の城山陥落の後検死し、浄光明寺跡に仮埋葬を行った。その後、市内外に仮埋葬していた 220 余名の遺骨をも収集して参拝所を設けるとともに、明治 16（1883）年からは各地に散在する戦没者の遺骨を収集し、現在の場所に整然と埋葬して、今日に至っている。

さらにその後、この辺一帯の一般の墓を移設して公園化し、明治百年記念事業としてさらに南洲公園の整備を行い、史と景の眺望を誇る憩いの場所ともなっている。

これらの 748 基の墓の中には、14 歳の少年や 5 人兄弟の墓、遠く山形県の庄内藩士の墓など、歴史上、幕末・明治初期の動乱期を象徴する人物の墓碑等も多数見受けられる。



西郷隆盛の墓



南洲墓地

私学校跡石塀

記念物（史跡）
昭和 43 年 3 月 29 日指定
所在地：鹿児島市城山町
所有者：国立病院機構鹿児島医療センター



私学校跡は、旧鹿児島（鶴丸）城の厩の跡で、明治 7（1874）年から明治 10（1877）年の初めまで西郷隆盛の創設した「私学校」のあった場所である。

西南戦争の際には激戦地となり、政府軍が猛攻撃をかけた際の弾痕が今も石垣のところどころに残っている。

この石塀は、鹿児島（鶴丸）城の厩の周壁として構築されたもので、築城とほぼ同じ頃であるとされるほど古く、また、西南戦争当時の面影をよく残していることから貴重な文化財となっている。

石塀に囲まれた区域は、古くは鹿児島（鶴丸）城の厩として利用されていたが、明治維新後、陸軍に引き継がれて、騎兵所、厩、軍馬方と名称が変わり、鹿児島（鶴丸）城が熊本鎮台第二分営となるとその付属施設となった。その後、明治 7（1874）年頃から、西郷隆盛は賞典禄を基金とした青少年の教育の場として「私学校」を建設したが、西南戦争に際し、私学校は焼失した。

さらに後年、敷地は国に移管し鹿児島大学の医学部付属病院敷地として利用され、現在は国立病院機構鹿児島医療センターとなっている。

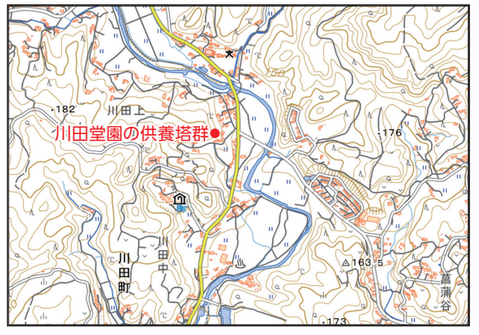
現在の石塀は、国道 10 号線の拡張工事の際、やや西側に後退して復元されているものである。



私学校跡石塀

川田堂園の供養塔群

記念物（史跡）
昭和 38 年 6 月 17 日指定
所在地：鹿児島市川田町
所有者：個人



郡山地域は、中世、満家院と称し、島津荘の寄郡であった。そのうち川田・西俣など数ヶ所は比志島氏の領有するところであった。比志島氏の祖栄尊は、三男盛佐（資）に川田名を与えたので、盛佐は川田氏を名乗り、代々川田城に居住した。この堂園の供養塔群は、川田の中ほどに位置する川田・比志島両家の墓所である。高さ 3 m に及ぶ壮大な 2 基の層塔を中心に数基の五輪塔及び宝塔（比志島・川田両氏の祖、頼重・栄尊・盛資の名を刻むものがある）、角石塔婆、笠塔婆、数十基に及ぶ小五輪塔がある。この中でも、縦 120cm、横 33cm の角石に永仁 5（1297）年の刻文のあるものが注目され、この供養塔群は、盛佐が父栄尊を弔ったものと推定される。鎌倉期から室町期に及ぶ史跡として、関係史料（『比志島文書』、『川田文書』）・川田城跡とあわせて、中世におけるこの地方の歴史を解明するうえで、また、中世の地方豪族の信仰・思想を解明する上からも重要である。なお、川田氏の墓は川田川を挟んだ対岸の旧大川寺（廃寺）にもあり、そこには室町期から近世に至る川田氏歴代の墓が残っている。



郡山町川田堂園の供養塔群

刀匠玉置家歴代の墓

記念物（史跡）
昭和 60 年 4 月 19 日指定
所在地：鹿児島市喜入町
所有者：個人



鹿児島の薩摩刀には、波平系、丸田系、奥系、宮原系、池系、玉置系等の系統があり、それぞれ優れた刀工を数多く輩出したが、玉置家を除く他の刀工の墓はほとんど合葬されていてその原形をとどめていない。

玉置家については、１代安貞及び２代安代から７代眞安に至るまで、その一門の墓が１か所にまとまって原形をとどめ、保存されており、極めて貴重といえる。

玉置家の中でも、２代主馬首一平安代は享保６(1721) 年正月、藤原正清（宮原系）とともに将軍吉宗に招かれて江戸浜御殿で鍛刀、一葉葵紋を賜り、江戸から帰途京都において主馬首を受領した。

面積 42㎡の墓地内に 26 基の墓石が立ち並んでいる。



刀匠玉置家歴代の墓

桜　島

記念物（名勝）
昭和 29 年 3 月 15 日指定
所在地：鹿児島市
所有者：鹿児島市

桜島は、鹿児島市街地の東方わずか約４km 先に位置し、活動を停止している北岳と活発に活動している南岳がつながった複合火山である。

桜島は、整った山容を静かな鹿児島（錦江）湾に浮かべ、鹿児島（錦江）湾に面する各地域から眺められる秀麗な姿は、全国に例を見ない景観でもあり、鹿児島県民の心のよりどころともなっている。

しかも、今なお活発に活動している活火山でもあり、古来何回となく繰り返された噴火活動の結果、時代の異なる流出した溶岩が、世界有数の溶岩原を形成しており、溶岩原における植物の遷移状況、動物の生息状況等、生物の生態系に関する貴重な研究の場所ともなっている。

桜島が誕生したのは、今から 26,000 年前の古沖積世とされており、火山としては比較的新しいものとされている。

噴火活動による火山灰のなかで、約 12,800 年前の噴火による火山灰は、特に、考古学上の時期を決定づけることのできる貴重な地層として、「サツマ火山灰」「サツマ層」と呼ばれている。

桜島の大きさは、周囲 52km、面積 80㎢、北岳の高さ 1,117m である。



桜　島

噴火により埋没した鳥居

記念物（天然記念物・地質鉱物）
昭和 33 年 4 月 23 日指定
所在地：鹿児島市黒神町
所有者：腹五社神社

噴火により埋没した鳥居とは、大正３(1914)年１月の桜島の大噴火から噴出した溶岩、軽石、火山灰等によって厚く地表を覆われて埋没した腹五社神社の鳥居である。

この黒神町付近には火山灰等が多量に積もり、鳥居は上部だけを残し、約２ｍ程が埋まっているという。

当時桜島で一番裕福だった黒神集落では、その後、軽石の台地の上に新しく集落を建設したが、当時の東桜島村長であった野添八百蔵氏はこの鳥居と近くの門柱を大噴火の記念物として後世に残すため、その発掘を中止して保存した。

しかし、今もうち続く降灰に悩まされながら、門柱も少しずつ埋もれつつあり、自然の猛威をおもい知らされる。



噴火により埋没した鳥居

噴火により埋没した門柱

記念物（天然記念物・地質鉱物）
昭和 33 年 4 月 23 日指定
所在地：鹿児島市黒神町
所有者：個人

噴火により埋没した門柱とは、鳥居と同じく大正３(1914)年の大爆発によって埋没した、永野氏宅の門柱である。もとの高さは2.5m あったといわれるが、今も続く降灰に悩まされながら、門柱も少しずつ埋もれつつある。

埋没した門柱は鳥居と共に、火山爆発の猛威を如実に実証するものとして貴重である。

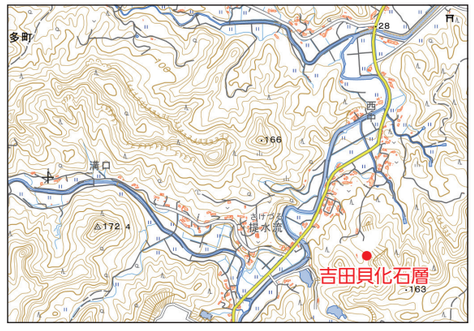




噴火により埋没した門柱

鹿児島市西佐多町の吉田貝化石層

記念物（天然記念物・地質鉱物）
平成 20 年 4 月 22 日指定
所在地：鹿児島市西佐多町
所有者：株式会社　ガイアテック



吉田貝化石層は、琉球列島に分布する琉球層群（石灰岩）に対比され、ミンデルーリス間氷期（約 30 万年～40 万年前）の亜熱帯の海の最北部に堆積した海成層である。

化石は、おもにフジツボの破片からなり、二枚貝、巻貝、サメの歯、カメの甲羅等が見つかっているが、このような化石構成種は珍らしく日本では他に報告されていない。

また、化石層には、アラゴナイト（霰石）の結晶が多く含まれているが、アラゴナイトは不安定鉱物であることから、数十万年を経た貝化石層に残ることはまれで、岩石鉱物学的にみても吉田貝化石層は学術上貴重な存在である。



吉田貝化石層
（写真提供：株式会社　ガイアテック）

薩摩隕石（さつまいんせき）

記念物（天然記念物・地質鉱物）
平成 27 年 4 月 17 日指定
所在地：鹿児島県立博物館
所有者：鹿児島県



薩摩隕石（国際名称：九州隕石）は、明治 19（1886）年 10 月 26 日午後 3 時ごろに伊佐地方に落下した一群の隕石で、その大半が海外へ流出し、日本では国立科学博物館などに数点が残っている。その内のひとつが平成 13（2001）年に国外から買い戻され、鹿児島県立博物館に所蔵されている。標本の表面は濃いこげ茶色を呈し、溶融皮膜が顕著で、指で押し付けたような凹みが発達しているが、内部は明灰色で球粒が点在している。大きさは 8 × 8.5 × 6 ㎝、重さは 528g、密度は 3.4g/㎤、化学組成は酸化鉄が約 24％、酸化マグネシウムが約 24％、二酸化ケイ素が約 38％と報告されている。薩摩隕石は石質隕石のコンドライトで、その中でもカンラン石・シソ輝石を多く含むＬタイプと呼ばれるものである。平成 22（2010）年 6 月に小惑星探査機「ハヤブサ」が小惑星イトカワから表面の物質を持ち帰った結果、石質隕石のコンドライトはイトカワと同じＳ型小惑星からもたらされたことが明らかになった。



薩摩隕石

スレッドレーススコリア

記念物（天然記念物・地質鉱物）
平成 28 年 4 月 19 日指定
所在地：鹿児島県立博物館
所有者：鹿児島県

鹿児島県立博物館所蔵・展示のスレッドレーススコリアは、大正 3（1914）年 1 月 12 日に始まった桜島の噴火に伴う火山噴出物である。当時、鹿児島女子師範学校の教師であった山口鎌次によって発見され、県立博物館（当時、県立図書館）に運搬されたものである。発見時の形状は不規則な楕円体で、長径は約 210cm、短径は約 165cm と報告されている。山口鎌次は、詳細な岩石学的分析の結果、このスレッドレーススコリアが桜島本来の輝石安山岩質マグマの発泡によって形成されたものではなく、既存の深成岩が母岩で、大正 3 年の噴火に係るマグマは、このスレッドレーススコリアの岩片に、高熱によってその組織を変化させる役割を果たしたに過ぎないことを明らかにした。この考えは、大正 3 年の噴火によって放出された花崗岩岩片の存在によって、複数の研究者に支持されている。古くから知られていたハワイのキラウエア火山産の同名のスコリアとはまったく起源と成因を異にすることから、世界的に見ても極めて貴重な標本である。



スレッドレーススコリア

特殊羊歯類及び蘇類の自生地

記念物（天然記念物・植物）
昭和 35 年 6 月 20 日指定
所在地：鹿児島市東桜島町
所有者：個人

東桜島町湯之集落から山地に入ったところに、通称「湯之の風穴」と呼ばれる溶岩隧道（トンネル）がある。この周辺は風穴から 1 年中、平均 15℃ 前後の湿度の高い風が吹き出している。昭和 30（1955）年代にはこの周囲では羊歯や蘚苔類が旺盛に生育しており、その中には「サクラジマイノデ」「オオヤグルマシダ」「コケシノブ」属の一種や、「ヘビゴケ」「ヌマゴケ」「オカムラヒシャクゴケ」等のコケ類等、特殊な植物があった。

特殊な植物のなかで、「オオヤグルマシダ」は熱帯系植物、「ヘビゴケ」は熱帯・亜熱帯の植物、「ヌマゴケ」は高山系の植物、「サクラジマイノデ」は桜島固有の植物である。

「風穴」地帯の特殊な植物分布を示す好適な事例となっている。

現在では、大量の降灰があったり風穴周辺を被っていたクロマツがマツクイムシによって枯れたりしたこと等による環境の変化のためか、その数が激減し、絶滅している植物もある。





特殊羊歯類及び蘇類の自生地

世界で初めて精子が発見されたソテツ

記念物（天然記念物・植物）
平成 20 年 4 月 22 日指定
所在地：鹿児島市城山町
所有者：鹿児島県



このソテツは、鹿児島県立博物館考古資料館（かつての県立興業館）前に植栽されている。

当時、東京帝国大学農科大学助教授であった池野成一郎は、ソテツの受精した胚珠を観察して、精子を発見し、明治 29（1896）年植物学雑誌 10 号に論文「ソテツの精虫」として発表した。これは、当時の植物学では世界的な発見の 1 つであったが、高等教育が始まって間もない日本での出来事ということで、しばらく信用されなかった。この精子発見は、裸子植物が雌の生殖器官として胚珠を進化させながら、雄の生殖細胞としては精子を保持するという原始的な特徴を合わせ持って進化していることを明らかにしたものである。

なお、同年にイチョウに精子を発見した平瀬作五郎とともに日本学術史上重要な成果となった。



世界で初めて精子が発見されたソテツ

ウシウマの骨格

記念物（天然記念物・動物）
昭和 38 年 6 月 17 日指定
所在地：鹿児島県立博物館
所有者：鹿児島県



「ウシウマ」とは、その様相が牛に似ているため古来からその名があるが、ウマ科ウマ属の一種で体型は馬そのものである。

慶長年間（1596 ～ 1615）年間に豊臣秀吉の慶長の役に従軍した 17 代島津義弘が、朝鮮半島から 10 頭を持ち帰り吉野で飼育したのが始まりである。

その後、馬の生産に適している種子島に 3 頭を移送して繁殖させ、一時は 50～60 頭まで増えていたという。

しかし、明治維新後またたく間に絶滅の危機に瀕した。このため、地元種子島の田上七之助氏が最後の 1 頭となっていた雄 1 頭を品種交配しながら、原種に近づけていった。

さらにその後、戦争中のこともあって管理が行き届かず、昭和 21（1946）年には最後の 1 頭となった第 4 田上号も死んで、絶滅してしまった。20 世紀絶滅したほ乳類の 1 つと言える。

このため、その骨格を昭和 38（1963）年に組み立てて保存することとなり、学術上からも貴重な資料となっている。

なお、西之表市にある種子島開発総合センターにもウシウマの骨格が展示されている。



ウシウマ
（写真提供：鹿児島県立博物館）

市指定の文化財